

平栗清司編

高校生は反逆する

激動の季節をむかえて



高校生は反逆する

平栗清司編



679

100万人の焦点 三一新書

本書には、左記の高校の高校新聞、校友会紙誌、同人誌、闘争ヒラ等に発表されたものを、一言一句変更せずそのまま収録しました。

青山高校／掛川西高校／全都定時制高校共闘会議(準)／平塚江南高校／宮原高校／静岡高校／旭丘高校／松本深志高校／(私立)武蔵高校／灘高校／浦和高校／八潮高校／墨田川高校／東淀川高校／鴨沂高校／桂高校／尼崎北高校／両国高校／神戸高校／向陽高校／日比谷高校／麻布学園高校／小山台高校／姫路商業高校／寒河江高校／住吉高校／九段高校／江東商業高校／白鷗高校／上野高校／岡崎高校／諏訪清陵高校／江北高校／大聖寺高校／瑞陵高校／淑徳学園高校／稻沢高校



高校生は反逆する ¥320 三一書房

それを可能にするのが、この不安なのである。もし僕達がこの不安に襲われる機会を持たないとしたら、果たして僕達は自らの存在の意味を見出し創り出しえるであろうか。

受験勉強（これは僕の言わんとすることの一例にすぎないが）を単に大学に入るための手段として落としめてしまふ人もあるかも知れない。僕はそれを否定しない。ただ忘れてならないことは、そこで感じる不安や喜びをひとつひとつかみしめていかねばならないことである。そうでなければ、仮に大学に入れたとしても、今までと少しもかわらなくなってしまうのではないかと思う。惰性に流される。これをまず克服しない限り、僕達は決して何もできやしないからである。

例えば、今の大学をみてみれば理解してもらえらると思う。決して安易に何かをなせる状況ではない。そうした時に、僕達が大学を目ざしているということ、そこに僕達は無尽蔵な何かを発見しうる。すなわち各自の生活のあり方総体が根底的に問われているのである。今日の大学紛争を契機として多くの学生、知識人が現代社会のあり方を自らの問題として考えるようになったと思われる。だが、しかし、僕達が是非とも注意すべきことは、そういう事態が起こる以前に考えておかねばならないということである。そのためには、各人が自らの生活を不断に凝視し、そこから各人なりの、我を我ならしめる術を発見し、実践していくことが必要である。そうでなければ、いつになっても僕達は外から強制されて動くロボット、すなわち僕達とは異質なものたることに甘んじなければならぬであろう。その行手に待ち受けるものは、ただ空しさのみである。いや、それすらないのかも知れない。

否定的思惟の確立

長谷川章雄・愛知県立岡崎高校新聞 一九六八年二月三日号から

現実状況が複雑にみえるとき、現実には埋没することなく原理的に思考することはむずかしい。オートメーションとコンピュータとの支配し管理する社会では、この社会を超越し、批判するための合理的基盤が失われ、非合理なまでに合理化の貫徹される現状を肯定するところの、対立・緊張のない『一次元的』な人間および思考の大量生産となる。この巨大な合理的機械文明社会を脱却する道は、この社会を全体として非合理とする大いなる拒否以外にない。否定の意識―変革の意識、これこそ現実変革のテーゼである。しかしながら現実はどうか。若者たちの反逆のエネルギーは、ゴーゴーとテレビ文明に単なるフラストレーションとして吸収され、一般庶民はマイホームのからにとじこもり、人民であることを忘れてしまっている。変革の課題はあくまでも庶民たることをやめて、人民たる過程の中に追求されなければならないのだ。人間社会は、本質的にはゲームンシャフトであらねばならない。人間疎外という現実状況は、能率優先、技術万能の潮流が生み出したものである。思想の復活を唱えることは、すなわち現在では逆行運動のなかの現実変革となる。したがって現実変革は体制外の疎外層のみによって実現される。しかしながら、かつて「社会変革の発酵素」であったプロレタリアート大衆は、高度工業社会では今日「社会統合の酵素」と化してしまった。高度技術の圧倒的な無名の力と能率とは、あらゆる否定的思惟を吸収しつくし、肯定的な思惟の寛容を押し広げ、表面の合理性と内実の非合理性とを見分けがたくしている。またこの過程には逆過程も存在することも事実である。物質的技術的ならび

に科学的生産力は我々のためにあるのだ、と体制側が強調すればするほど、我々にその非合理が認識され、信条化されてくる。いふならば、主観的要素——観念的逸脱なのである。我々は、我々の思考の中にひそかにしのびこむ安定と秩序への欲求を乗りこえねばならない。

主観的要素の確立——「否定」の意識——「変革」の意識。これこそ我々に与えられた唯一の真理追求の道なのである。

「自由とは、今日人々が、まだ、ユートピアと名づけているものの実現としてのみ考えられうるものだ」

新鮮なる自治の探究

長野県立諏訪清陵高校新聞 一九六七年五月三二日号から

この清水ヶ丘も、桜の季節は去り、また中間テストという、一年生にとって初めての大きなテストも去り、いよいよ学友会全体が、一つの目的物に向かって曲りなりにも活動を開始した感じだ。諸君達にとって、学友会活動が、あるいは高校生活そのものが、如何なる価値存在であるか知らないが、諸君達の先輩として、僕達なりの清陵観とアドバイスを述べたい。

諸君がどんな目的をもってこの丘にやってきたかは知るよしもないが、我々のその頃よりも尚一層、受験のためにやって来たという感じを強くうけてならない。高校生である限り、当然勉強を怠ってはいけないが、恐らく受験のための勉強を切望していると思われる諸君達に一抹の白々しさを感じる。もちろん本来の勉強の本質をとり違えていることに対する腹だたしさでもあるが、そればかりではなく我校を有名校——進学者の多

い高校とおもっている君達が白々しいのである。

要するに、現在の受験体制は、かつてのような、学問を探究する授業、人間形成に役立つクラブ活動とは、極言すれば相入れぬものである。ところが今までの清陵はこの相入れぬ二つの中途半端に両立していたために、あのような合格率の崩落を余儀なくされた。これからは、進学希望者が大多数を占めている限り、必然的に当校でも受験体制は強化され、合格率は多少上がるだろう。おそらく諸君の多くは、大学のため、ここへ来たのだから、受験のための授業というものを否定はしていない。そしてまた、現実との妥協において客観的にも否定することはできない。クラブ活動などについては次に述べることであるが、しかし、それらの衰退と人間性の欠けた授業が、将来いかなる悪影響を与えるか考えてみたことがあるだろうか。協調性が、自主性が、創造性が忘れ去られた生活から、如何なる人間の生活が保障されよう。君達にとって大切なことは、受験勉強もさることながら、その内にも常に、なぜこの環境の中で強制的にこれをしなければならぬのか、という自意識を持つということである。

次に学友会のことである。我々は君達が主体性を養う場として学友会を提供したい。

先に述べたように、受験体制という社会風潮は、学友会活動にとって根本的な問題であり、現に清陵においてもあらゆる方面で大きな支障になっている。

諸君もよく耳にするであろう、いわゆる学友会の沈滞は、いかなる手段をしても抜け出る様相もなく、いわば崩壊の一步手前となって来た。苛酷なまでの試練であった去年の相次ぐ流会も、無気力、無関心が一般的な今日、最早、当然にして必然な事態であったのかも知れぬ。

またクラブにおいても、クラブ員一〇人以下のそれは軒並みである。クラブ活動が学友会を動かしていた昔の清陵は、無残にも崩れ去り、今や、会館も少数者の城と化してしまった。

今号の主な記事

- ① 新校舎、文化祭
- ② 交通安全を願う
- ③ 学生運動を考える
- ④ 〓他校訪問〓、「冬」

岡高新聞

THE OKAKO

発行所

愛知県立岡崎高等学校
 愛知県岡崎市明大寺町伝馬1
 発行 新聞常任委員会
 発行責任者 平岩 幸一
 編集 新 聞 部
 編集責任者 安江 知江子
 新聞部顧問 市川 光彦



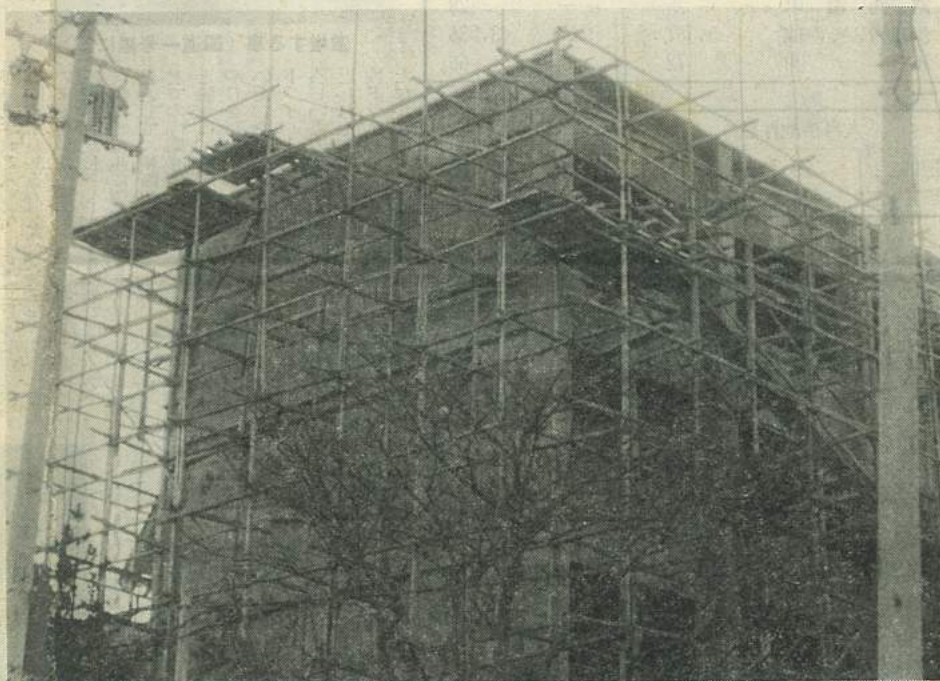
論 説

落第高揚論



最近我が校では、落第の実施することを、不可能であるから否かを考えているというウワサが、校側の意志を反映して素直に反省していたが、先日職員会で正式に三科目以上の落第点（いわゆる赤点）を保有せし者については、進級を許さず現級に留め、充来本校では、この種の落第は例が少なく落第とは休学による単位不足によるものに限られていたようである。それ故今回の処置は、学校側の英断であろうと評すべきであろう。

落第については、生徒において賛否両論あるうらと思いが、もろ既に決まったことであるし、よしんば未だ定まらずの状態であっても生徒が決定に参加



新校舎誕生

来春に完成

え、他人の足でまといになるわけであるから、落第によってマイベであるから落第で学ばれるのをお進めする次第である。それでは、学業のレベルの低下を招く恐れがある。ここはその学年に不適当なレベルの低い者がいたとしても、教師にしては、その着違の存在によって授業すといふこと、そのクラスの授業のレベルは低下し、ひいては、その学年のレベルが下がるのは当然である。また、これに伴って精神的な弛みも助長する結果となる。これは、ある意味では迷惑であるし、またできない努力しようにある人曰く、「なんとなく大福



岡崎スポーツガーデンにて

否定的思惟の確立

二の一 長谷川 章雄

現実状況が複雑にみえるとき、現実に埋没することなく原理的に思考することはむずかしい。オートメーションとコンピューターとの支配し管理する社会では、この社会を超越し批判するための合理的基盤が失われ、非合理的なまでに合理化の貫徹される現状を肯定するところの、対立、緊張のない「一次的」な人間及び思考の大量生産となる。この巨大な合理的機械文明社会を脱却する道は、この社会を全体として非合理とする大なる拒否以外にはない。否定の意識、変革の意識。これこそ現実変革のテッセである。しかしながら現実はどうか。若者たちの反

逆のエネルギーは、ゴゴとテレビ文明に単なるプラスチックンとして吸収され、一般庶民はマイホームのからにどじこり、人民であることを忘れてしまっており。変革の課題はあくまでも庶民たることをやめて、人民たる過程の中に追求されなければならないのだ。人間社会は、本質的にはグマインシャフトであらねばならぬ。人間界外という現実状況は、能率優先、技術万能の潮流が生みだしたものである。思想の復活を唱えることは、すなわち現在では逆行運動のなかの現実変革となる。したがって現実変革は体制外の陳外層のみによって実現される。しかしながら、かつて「社会変革の殉葬者」であったプロレタリアート大衆は、高度工業社会で「今日「社会統合の犠牲」と化し

てしまった。高度技術の圧倒的な無名の力と能率とは、あらゆる否定的思惟を吸収しつくし、肯定的な思惟の露骨を押し広め、表面的合理性と内実の非合理性とを混同して見ている。またこの過程には逆過程も存在することも事実である。物質的技術的ならびに科学的生産力は我々のためにあるのだ、と体制側が強調すればするほど我々にその非合理性が認識され、信条化されてくる。いうなれば、主観的要素―観念論的逸脱なのである。我々は、我々の思考の中にひそかにしひこむ安定と秩序への欲求を乗り越えねばならぬ。主観的要素の確立―「否定」の意識―「変革」の意識。これこそ我々に与えられた唯一の真理追求の道なのである。

「自由とは、今日人々が、まだユートピアと名づけているものの実現としてのみ考えらるるものだ。」

赤鬼も、かくや」と思うばかり。鬼気迫る思いがした。

現代の女性の装いは戦後、女性解放が進んだためか男気をそそる方向からはずれてきているように思う。生殖は長い間美を産み出し、美は愛情の基礎となり、愛情は生殖の心の準備となって来た。そして私は自然の立法は正しいと思うのである。

本校の女性徒諸君はミニをはいて俗悪なるアンヨを私たちの前にさらしたりせず、自然の美しさでいつまでも私たちの気をひいてほしいと思う。

また今回は発行が遅れて申し訳ない。―陰の声「毎号毎号、あやまってばかりじゃないか。たまには草々とはばって現われるノ」

今号は、「面に「政治」、「交通安全キャンペーン」を特集し、また面には「冬の生活」について、健康保健上のアドバイスをしましたので、じっくり腰を据えて読んでください。それでは皆さん、冬休みを計画的に過ごしてください。「後悔、先に立たず。」にならないように……。

編集長 安江知江子(二ノ四)
副編集長 近藤佐恵子(一ノ九)
瀬戸 悦子(一ノ九)

(新入部員紹介)
一年 井上 真 兵藤 和弥
石畔 重次 高橋 俊光
水田 隆司

発言

女性讃歌

二の六 鳥居喜代和

花壇整備が行なわれた。春には花をつける。そもそも花の美しさとは何であろうか。蝶や蜂を引きつけるためのものであるはずだ。(そんなあの歌謡曲があるが、この際関係ない。)昆虫は花の香りに包まれて媒介する。そこに次の世代の生命が芽をえる。花粉をめしべにつけることができれば、花弁や芳香は何の意味も持たなくなる。ただ種子を作ればよいのだから。

孔雀が美しい羽根を開いて見せる。或いは鳥が美しい声で鳴く。雨蛙がやさしい声でゲロゲロと鳴く。これは総じて雌を獲得するための、ひいては生殖のためである。いわゆる、種族維持という原則ののっとなってはいる。

ところが生殖を建前としない自然の所産がある。籠の鳥。何となくれば、つがいにならなくて競争の必要がないか。そこでなければ永久に一羽である。言わば目的喪失の美である。チューリップなどは種子によるより、球根によって種族維持する方がはるかに確立が高い。哀れな花である。

人間の世界にもそのようなことはあり得る。女性美の規準がどう変化しても所詮は生殖の美である。長い髪の少女に胸をときめかせた真珠は相聞歌を詠い、柳腰の乙女に江戸大阪の商人は目を輝かす。

しかし人間界に於てもやはり、目的を失った花はある。売春禁止法があるのであることばぬぎにして、女性も男性何如を問わずしての女性より美しくありたいと願う。それでも男性も一緒にになって美しいと思っているうちはよい。然し世の女性の多くはあさはかである。しまいはは男性の目からはどう見ても俗悪としか映らない姿をして喜んでいる。私の家は水商売なのでよい経験をしたことがある。その女性は素顔が大層美しく私も情がさす思っていたが、店をやめて半年程後に再会したら、金髪に染め、足の爪までマニキュアをし、金色のミニをはいてシャッ△猫を抱いていた。まさに地獄の

編集後記



左より 谷川、矢吹、中島、秋田、加藤、筒木

「二、二組同志」などと工夫をこらした候補者たちもいたが、逆に反感をかきたたさそうであった。

花壇整備が行なわれた。春には花をつける。そもそも花の美しさとは何であろうか。蝶や蜂を引きつけるためのものであるはずだ。(そんなあの歌謡曲があるが、この際関係ない。)昆虫は花の香りに包まれて媒介する。そこに次の世代の生命が芽をえる。花粉をめしべにつけることができれば、花弁や芳香は何の意味も持たなくなる。ただ種子を作ればよいのだから。

孔雀が美しい羽根を開いて見せる。或いは鳥が美しい声で鳴く。雨蛙がやさしい声でゲロゲロと鳴く。これは総じて雌を獲得するための、ひいては生殖のためである。いわゆる、種族維持という原則ののっとなってはいる。

赤鬼も、かくや」と思うばかり。鬼気迫る思いがした。

現代の女性の装いは戦後、女性解放が進んだためか男気をそそる方向からはずれてきているように思う。生殖は長い間美を産み出し、美は愛情の基礎となり、愛情は生殖の心の準備となって来た。そして私は自然の立法は正しいと思うのである。

本校の女性徒諸君はミニをはいて俗悪なるアンヨを私たちの前にさらしたりせず、自然の美しさでいつまでも私たちの気をひいてほしいと思う。

また今回は発行が遅れて申し訳ない。―陰の声「毎号毎号、あやまってばかりじゃないか。たまには草々とはばって現われるノ」

今号は、「面に「政治」、「交通安全キャンペーン」を特集し、また面には「冬の生活」について、健康保健上のアドバイスをしましたので、じっくり腰を据えて読んでください。それでは皆さん、冬休みを計画的に過ごしてください。「後悔、先に立たず。」にならないように……。

編集長 安江知江子(二ノ四)
副編集長 近藤佐恵子(一ノ九)
瀬戸 悦子(一ノ九)

(新入部員紹介)
一年 井上 真 兵藤 和弥
石畔 重次 高橋 俊光
水田 隆司

学生会役員選挙 候補出る

長と書記

三年度後期役員選挙は(月)に行なわれた。に締切日を延ばす必要でなく、会長と書記には対立候補が出て、選挙らしい選挙が行な

得票
三二一
三二八
三〇四 不信任
八九六 二四一
六〇〇
八三〇
四二六
九六〇 二二八
九二九 二〇四
十一% 無効は不明
は立合演説にのぞんで

国産・輸入高級婦人服地

洋装のフタバヤ

岡崎市康生通 2 丁目
TEL (代) 21-0992

コート・レンズ

近視の度の強さがメダたなくしかも
明るく目もとがスッキリ見えます。

メカネ 三浦

岡崎店 康生通東 2 丁目 15 TEL (21)1072
蒲郡店 元町 6 丁目 50 TEL (9)2512